

平成13年2月20日

第137回『21世紀塾』参考資料

(第11回提言)

今、広域行政の為になすべきこと

『21世紀塾』代表世話人 小野 徹

【問題提起】

今年の1月1日まで、1年あまりをかけて『伊豆新世紀創造際』が行われた。

あいにくなことに、開催時期が伊豆七島、特に三宅島の噴火と重なってしまい、誘客効果の方は薄れてしまったが、『回廊』の発想で、隣接地域との連携ができたり、伊豆の地域住民に、「自分たちの手で、自分たちの地域を何とかしなければ」の意識を醸成させたことは、新世紀の伊豆を考える上で、期待通りの成果があったといえる。

しかし、さらに進んだ伊豆の地域連携や、東部の中核都市づくりの必要性が求められている今、もう少し強力な後押し施策がないと、伊豆は相変わらず「一つずつ」の、元のもくあみとなってしまう恐れがある。

その為にも、伊豆全域の情報を一元化して発信する『情報センター構想』などが提唱されているが、広域行政組合の運営等、隣接市町村で「やれるものからやる」姿勢が必要であろうし、私自身は、その上に、「環状道路」の早期完成と、市町村職員の「人事交流」を提言したい。

歴史を紐解くと、江戸時代に三百諸侯と称された独自色の強い幕藩体制を、一日も早く中央集権国家に移行しようと、乏しい財政事情の中から、明治新政府がとった施策は、鉄道建設事業であった。

「無」から始めて「線」とし、それを「ネットワーク化」していった、中央と地方、地方と地方を結んでいったわけだが、それぞれ文化や生き立ちの違う旧藩城・地域の垣根を取り外して、交流・連携させるのには、絶大な効果があったとされている。

こうした例からすると、沼津・三島をつなぐ幹線道路が、国道1号たった一本しかない状態で、両市の合併の是非など、まだまだこれからの段階ではないかといえる。

むしろ、地域全体を「ひとくくり」にするという意味からは、沼津、三島を包含する『東駿河湾環状道路』ができれば、清水町、長泉町、函南町までを一体とした東部

中核都市など、すぐに実現に向けて動き出すだろうと考えられる。

環状道路の建設が急がれる所似だし、別の例で言えば、東京都の石原知事が、新たに開通した地下鉄名を、あえて『大江戸線』という時代がかった命名をしたのも、この地下鉄が、主に江戸時代から栄えた下町や、都の周辺部を通る環状線であることから、これらの地域を一本としてまとめあげたいという意欲の現われではないかと想像される。

もう一つの施策は、「隣接するすべての市町村」が、職員の「人事交流」をすることだ。

すでに長年行われてきている県と市町村職員とのタテの人事交流に加え、隣接市町村同士で、ヨコの人事交流を進める。

昨年より、東部地区の商工会議所が、一同に会しての賀詞交換会を始めているが、地域を連携するということは、人が連携することであることを深く認識し、「それぞれの市町村境で隣接するすべての市町村と、職員の人事交流を図る」ことを東部地区全体で申し合わせ、実行に移して行くことを提言したい。

隣の市町村の実情や、考え方を知ることが、地域連携には、遅いようで一番の早道であると確信するからである。

『新世紀創造祭』の目的は、もともと地域の人材を育てることにあっただから、ここで「人の交流の価値」を再度見直すのも、その立派な成果となるのではなかろうか。